そのような点は些事に属する。「食育」が強調される昨今、自己のテクノロジーとしての食の問題に真っ向から、しかも従来の文化史的アプローチを越えて、身体・健康・医療の思想史として再措定した試みには賛辞を贈らねばならないだろう。

（瀧澤　利行）

〔慶應義塾大学出版会、東京都港区三田二―十九―三十、電話〇三―三四五一―三一六八、二〇〇五年八月、A五判、三七八頁、三八〇〇円〕

神谷　昭典　著

『日本近代医学の展望　医科大学民主化の課題』

二〇〇五年暮れ、一〇何年かぶりに大阪の医学史研究会に出席して、ふるい仲間の何人かにお会いした。そのなかに、喜寿をむかえた著者もおられた。

これは、『日本近代医学のあけぼの――維新政権と医学教育』（一九七九年）、『日本近代医学の定立――私立医学校済生学舎の興廃』（一九八四年）、『日本近代医学の相剋――総力戦体制下の医学と医療』（一九九二年）（いずれも医療図書出版社）につづくものである。これで著者の日本近代医学史四部作が完結したことに、まずお祝いをもうしあげたい。いずれも緻密な調査にもとづく独自の切り口のものである。

本書がとりあげている医科大学とは主として、著者がまなび、たたかった名古屋大学医学部である。いうまでもないが、愛知県立医学校は、一八八七年の勅令第四八号「府県立医学校ノ費用ハ明治二十一年度以降地方税ヲ以テ之ヲ支弁スルコトヲ得ズ」にもかかわらずいきのびた、数すくない公立医学校の一つである。著者が強調するように、地域社会のために自前で運営されてきた医学校であって、国家目的にそって上から創成された学校ではない。その学校、教職員、学生が国家の意志によってどんな犠牲をしいられ、それに抵抗してきたか。その壮大な叙事詩が本書である。

第一章は「『特高月報』からみた名古屋帝大医学部」。キリスト者学生運動から無産者医療運動にとびこんでいった青木文次、その同志米沢進のことや、〝名帝大医学部共産主義グループ〟のことなどがのべられている。ここで目につくのは、教授たちが左翼学生に庇護的であったことである。青木の獄中書簡は、この闘士のういういしい心をつたえている。本章にはまた「名古屋医科大学助手団スト」の項が付載されている。県立愛知医科大学は一九三一年官立に移管されて名古屋医科大学になったが、このさい東京帝国大学出身者を採用して県立以来の九名の教授が任用されなかったことに抗議して、助手団がストライキにでたものである。この助手団の結束はのちにのこった。

第二章「戦時下医育と戦後処理」は、旧〝満州国〟のジャ

ムス医科大学および東京の興亜医学館につきのべている。第三章は「米軍占領と医（歯）学教育」で、占領下での医学・歯学教育の再編をのべている。

「国民のための医学と医療」を求めて」と題された第四章は、名古屋大学医学部の学生自治会の民主化、一九五〇年にはじまったセツルメント運動、それが発展しての診療所設立、公害調査、伊勢湾台風にさいしての旧セツラーの活躍（さらに、南医療生活協同組合の結成）がえがきだされている。このなかには著者の名もでてくる。

第五章「名古屋大学医学部民主化のたたかい」は、著者がもっとも力をいれている章である。戦災後の名古屋大学医学部の復興の歩み、医科系大学における系列の変遷などについで、一九六七年の小児科後任問題がとりあげられている。教授会の密室での選考に異議をもうしたてた小児科医局に呼応して五者協議会（教職員組合、副手会、大学院自治会、研修生委員会、学生会）が教授会とたたかい、〝全構成員自治〟による大学の自治が獲得された経過がくわしくのべられている（このとき暗躍した外科医青木大二郎の名がくりかえしでているが、この人の背景などはもうすこしくわしくかいてほしかった）。こういった運動も一九三一年の助手団の伝統をうけつぐものであった。

第四章、第五章にはわたしのしる何人かの名前もでてきて、まさに今につながる現代史と目をみひらいてよんだ。

第一章の「助手団スト」の項では、おわれようとした精神科の北林貞道教授（愛知医学専門学校卒業）の就任をつよく要望する声明書を呉秀三がだしたことをしった。北林も東京府巣鴨病院の元医員であったが、北林の後任におされた杉田直樹こそ呉の秘蔵っ子であった。その杉田でなく北林をおした呉の見識を本書でしった。わたしにとって松沢病院での先輩である加藤普佐次郎が杉田におくった公開状のこともでている。かれの弟加藤三九朗は助手団ストライキを組織したのち、賀川豊彦にこわれて秋田の組合病院に赴任した。この組合病院には名古屋医科大学全学の応援がえられた。普佐次郎とともに三九朗も熱血漢であった。

こういう民主化の伝統を確立した名古屋大学医学部が、独立行政法人となったなかでその伝統をどうまもっていくのだろうか。畏友と同様の史眼をもった人が、この続篇をかいてくださることを切にのぞみたい。一五年後なら、わたしもよませていただけるかもしれない。

（岡田　靖雄）

〔新協出版社、〒一一二―〇〇〇六東京都文京区小日向四―二―五、電話〇三―三八一四―七七七一、二〇〇六年七月一日、A五版二八六頁、本体定価二八五八円〕